

垂井町遺跡詳細分布調査報告書（1）

2017. 3

垂井町教育委員会

序

垂井町は、岐阜県の南西部に位置し、南方に南宮山、西方に伊吹山を望み、中央部には揖斐川水系の相川が流れる自然豊かなまちです。また、歴史遺産も多く存在する歴史・文化の豊かなまちでもあります。本町では、平成 24 年度から平成 28 年度に町域の一部の遺跡分布調査を行い、本書はその報告書となります。本書が貴重な埋蔵文化財を守り、後世に伝えていくことに資するとともに、町民の方々の地域への愛着を深めていただくことや、地域史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査にあたり、御協力をいただきました地元の方々を始め、関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 29 年 3 月

垂井町教育委員会 教育長 和田 満

例言

1. 本報告書は、岐阜県不破郡垂井町の垂井地区、宮代地区、府中地区、東地区、栗原地区のそれぞれ一部を対象とした埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査報告書である。
2. 調査は、平成24年度から平成28年度までの5カ年、文化庁国庫補助金を受け、垂井町教育委員会が実施した。
3. 本報告書の作成、執筆は亀田剛広が担当した。
4. 分布調査および本報告書に係わる図版、写真、遺物等の調査資料は垂井町教育委員会タルイピアセンターが保管している。

凡例

1. 遺物実測図は、土器・陶磁器1／3、石器1／2として統一した。
2. 遺物の時期比定については、主に下記の編年観に拠っている。

渡辺博人『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会、1984年
「美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋壺の型式設定と編年試案—」『美濃の考古学』創刊号、1996年

尾野善裕「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会、2000年

藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年
『中世瀬戸窯の研究』高志書院、2008年

中野晴久「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』2005年
3. 遺跡の概要等について、特に言及しない限り、下記を参照している。

『不破郡史』上、不破郡教育会、1926年

『垂井町史』史料編、垂井町史編纂委員会、1968年

『垂井町史』通史編、垂井町史編纂委員会、1969年

『岐阜県史』通史編 原始、岐阜県、1972年

大岡明臣『埋蔵文化財調査票 北部編』1974年

勝野勉『埋蔵文化財調査票 南部編』1974年

『新修垂井町史』史料編、垂井町、1994年

『新修垂井町史』通史編、垂井町、1996年

目次

序

例言 1

凡例 1

目次 2

第1章 概説

- (1) 垂井町の地勢と自然環境 5
(2) 分布調査の経緯と経過 6

第2章 分布調査の方法と成果

- (1) 調査の方法 7
(2) 遺跡の概要
- 1. 市之尾古窯跡 8
 - 2. 平尾古窯跡 8
 - 3. 不動北古墳 9
 - 4. 出目地山古墳 9
 - 5. 堅田古墳 10
 - 6. 美濃国分尼寺跡、美濃国分尼寺東遺跡、美濃国分尼寺西遺跡、堅田遺跡 10
 - 7. 石越遺跡 11
 - 8. 石仏谷遺跡 12
 - 9. 垂井一里塚 12
 - 10. 浅野幸長陣跡 13
 - 11. 日守塚古墳 13
 - 12. 日守遺跡 13
 - 13. 金蓮寺跡、春王安王の墓 14
 - 14. 池田輝政陣跡 14
 - 15. 宮処寺跡 15
 - 16. 御所野遺跡 15
 - 17. 神明屋遺跡 16
 - 18. 朝倉グランド遺跡 16
 - 19. 野田遺跡 16
 - 20. 西野古墳 17
 - 21. 西野遺跡 17

22. 朝倉古墳群	17
23. 真禪院遺跡	18
24. 宮代遺跡	18
25. 朝倉遺跡	18
26. 吉川広家陣跡	19
27. 北野遺跡	19
28. 隣松寺古墳	19
29. 鎧塚古墳	20
30. 中屋敷古墳群	20
31. 兜塚古墳	21
32. 南宮神社神宮跡	21
33. 最勝寺觀音堂跡	22
34. 安国寺恵瓊陣跡	22
35. 薬師堂遺跡（薬師堂跡）	22
36. 觀音堂跡	23
37. 千手堂跡	23
38. 南宮山頂経塚群	24
39. 毛利秀元陣跡	24
40. 中瀬遺跡	25
41. 四辻遺跡	25
42. 政所遺跡	25
43. 天皇遺跡	26
44. 大外道遺跡	26
45. 大領神社北古墳	26
46. 大領神社古墳	27
47. 森上古墳	27
48. 杉ノ本古墳群	27
49. 宮代廃寺跡	28
50. 谷の舞古墳	28
51. 南森下遺跡	29
52. 平古墳群	29
53. 茶臼山古墳群	29
54. 小黒見遺跡	30
55. 南山古墳群	30
56. 南山5号墳	31
57. 境野古墳群	32
58. 境野古墳	32
59. 境野遺跡	33

60. 八幡神社古墳群	33
61. 大平古墳群	34
62. 栗原古墳群	34
63. 扇平古墳群	35
64. 清御子古墳	35
65. 栗原九十九坊、栗原山中世墓群、栗原城跡（長宗我部盛親陣跡）	35
66. 栗棘庵跡	37
67. 清水寺跡	37
68. 栗原山麓遺跡	37
註及び参考文献	38

第3章 資料編

(1) 遺物観察表	40
(2) 遺物実測図	50
(3) 遺物写真	80
〈付篇〉 遺跡にかかる文化財保護法の適用と主な手続きの流れ 埋蔵文化財発掘の届出について	115

第1章 概説

(1) 垂井町の地勢と自然環境

垂井町は岐阜県西南部濃尾平野の北西部に位置する。面積 57.09 km²、海拔 30.6 m、人口は約 28,000 人（平成 28 年 4 月現在）で田園工業都市として発展してきた。北方に池田山塊、南方に南宮山塊がそびえ、町域を南北に分断する形で相川が東流している。東は大垣市、西は不破郡関ヶ原町、南は養老郡養老町、北は揖斐郡池田町と接している。

気候は太平洋岸式気候に属するが、北に伊吹山系・南に鈴鹿山系と山に囲まれている地形的特徴によって、冬季は日本海岸式気候の影響を受け、北西からの季節風「伊吹おろし」が吹き、積雪することが比較的多い。また、狭隘地のため、古代では東山道、近世では中山道、美濃路、現代では国道 21 号線や名神高速道路、東海道新幹線などが走り、京都、大阪方面と名古屋、東京方面とを結ぶなど、古くから東西の交通路が集中する交通の要衝として栄えてきた。

垂井町の中央部から東部・南東部にかけては、相川とその支流河川による扇状地となっている。中央部では河岸段丘が発達しており、湧水が豊富で、地名の由来となった垂井の泉が所在している。また、扇状地の特徴として河川の伏流により地下水位が低く、乏水地となっているため、「マンボ」と呼ばれる灌漑用地下水路が各所でみられるほか、東部、東南部の扇状地の扇端部では「ガマ」と呼ばれる扇端泉や、「湯壺」と呼ばれる湧水がみられる。



垂井町の位置

(2) 分布調査の経緯と経過

垂井町における遺跡の分布調査は、昭和40年代後半に、岐阜県教育委員会により、当時、垂井小学校教員だった大岡明臣氏と不破高等学校教員だった勝野勉氏が行ったものを嚆矢とする。2人の調査は、文献調査や現地住民への綿密な聞き取り、また、一部ではあるが遺物の表採によっており、当時周知されていた遺跡をくまなく、丹念に調査したもので、現在失われてしまった遺跡の情報など、貴重な調査結果となっている。この成果については、昭和51年（1976）刊行の『岐阜県遺跡地図』に反映されている。その後、垂井町教育委員会では、隨時、追加調査を行い、2003年に遺跡地図を整備した。しかし、これらは、系統だった調査とは言い難く、遺跡の範囲や性格等を十分に把握できていないことが予想された。また、開発事業の増加に伴い、遺跡範囲の設定が喫緊の課題になっていた。このような状況で、埋蔵文化財の保護、活用を一層進め、適切に状況を把握し、開発事業との円滑な調整を図るため、平成24年度から平成28年度までの5カ年、町教育委員会を主体として、遺跡の詳細分布調査を行うこととなった。

調査体制は次のとおりである。

教育長	渡辺眞悟（H24～H27） 和田満（H28）
生涯学習課長	多賀清隆（H24 教育次長兼務） 中島健司（H26 教育次長兼務） 多和田敦（H27） 衣斐修（H28）
タルイピアセンター館長	竹中敏明（H24、H25 より生涯学習課長） 大内武司（H25、H26） 渡辺保彦（H27、H28）
タルイピアセンター主査	原田義久（H24～H27、H28 より学芸企画係長）
タルイピアセンター主任	亀田剛広（H24～H28）

【整理補助員】佐藤まさみ（H24～H28）・藤井貴代美・高橋瓦世（H24）

【作業員】乾光廣・丹羽文雄・川地三好・岩田勝行・佐藤和夫・辻川尚一郎・高木綾子・長澤博千代（H24～H28）

第2章 分布調査の方法と成果

(1) 調査の方法

今回の調査は、垂井町内で今後、開発が行われる可能性が高いと予想される区域を対象として行った。分布調査の区割りについては、町域を都市計画図をもとに 500m四方の大グリッド（A～Z、1～20）に分け、さらにその中を 50m四方の小グリッド（1～100）に分けて行った。調査方法は、作業員による現地踏査での遺物の表採や地形観察、及び地元住民からの聞き取り調査を主とし、併せて、字絵図や米軍等の航空写真から土地利用や地形を読み取る歴史地理学的手法を用いた。現地では、上記のグリッド分けされた都市計画図に遺物採集場所などの情報を書き込んでいく形でおこない、採集遺物は地点ごとに袋分けして収納し、ユポ紙に採集年月日と「大グリッド・小グリッド—大グリッド内での通し番号」を遺物番号として記入し、同封した。また、適宜、G P S も用い、特に紙の地図では位置の把握が困難な山中での調査では効果を発揮した。その他、これまでに行われた試掘等の調査や、過去に教育委員会に持ち込まれた遺物、現在個人・寺院・他公共団体等所蔵となっている遺物も参考としている。



分布調査の様子



作業員集合写真

(2) 遺跡の概要

1. 市之尾古窯跡 (図1 採集遺物実測図 (1)、写真図版 1)

市之尾地区、JR東海道本線付近の山麓部に位置する古代の瓦窯跡。東に所在する平尾古窯跡とは同一の山麓上に位置する。下り線工事によって破壊されたと考えられてきたが、今回の調査で窯体の一部と思われる遺構を確認した。周辺からは、大量の焼土や瓦片が採集された。



市之尾古窯跡（西から）

2. 平尾古窯跡 (図1 採集遺物実測図 (1)、写真図版 1~2)

平尾地区北側に位置する古代の窯跡。小川栄一氏により発見され⁽¹⁾、美濃国分尼寺跡北西の山麓に所在するとされるが、現在、窯体は確認できず、場所の特定が困難である。南側に近接する揚水機上建設の際に多数の瓦が出土したというが詳細は不明。山麓付近に瓦片などの遺物がある程度まとめて採集される場所があり、ここが窯跡の可能性がある⁽²⁾。



平尾古窯跡（南東から）



瓦片採集地

ふどうきたこふん 3.不動北古墳

平尾字大浦、平尾集落の北東部の東海道本線すぐ北側に位置する。不動明王が祀られていた出目地山の北に位置することから不動北と呼ばれる。円墳で葺石が確認できる。分布調査で古墳に関する遺物は確認できなかった。



不動北古墳（北から）

でめじやまこふん 4.出目地山古墳

平尾集落北東に位置し、明治頃まで春日大明神が祀られていたため、通称、大明神山とも呼ばれる。「デメジ」は「ダイミョウジン」からの転訛と思われる。また、山頂東側の岩に不動明王を祀る小堂が江戸時代末頃まであり、この不動明王は現在、養老寺に祀られていると伝えられる。明治以前に盗掘されるまでは、横穴式石室の古墳が西側4基、東側に3基あったことから「七ツ塚」と言っていた。伝承では、石室の奥行き9尺（約270cm）、幅5尺（約150cm）、高さ4尺（120cm）ほどで、中に鋸びた2尺（60cm）ほどの鉄の直刀、須恵器、炭の小片があったという⁽³⁾。また、変形文鏡も出土したとされるが、詳細は不明である⁽⁴⁾。分布調査では、少量の近世陶器片のほかは古墳に関する遺物は確認できなかつた。



出目地山古墳（南から）



山頂東側の岩

5. 堅田古墳

平尾字堅田、県道赤坂垂井線の北側に位置する。石室の石材が露出しており、墳頂には平安時代の伝説上の大盜賊、熊坂長範が奪い取った金品を隠したところという伝承から「古墳 伝長範匿馬屋」の石柱が建つ⁽⁵⁾。



堅田古墳（南西から）

6. 美濃国分尼寺跡・美濃国分尼寺東遺跡

美濃国分尼寺西遺跡・堅田遺跡 (図2 採集遺物実測図(2)～図3 採集遺物実測図(3)、写真図版2～4)

美濃国分尼寺は8世紀に国分寺と共に各国に造営された官営寺院である。平成16年(2004)から平成20年(2008)までの5カ年にわたりて垂井町教育委員会によって範囲確認の発掘調査が行われた。調査の結果、寺域は、美濃国分尼寺跡周辺に残る土壘から、東西150m、南北150m以上で南北に長い長方形になる可能性が指摘されている⁽⁶⁾。美濃国分尼寺東遺跡・堅田遺跡は美濃国分尼寺跡の東方に位置し、平成26年(2015)に岐阜県教育委員会によって行われた道路の拡幅工事に伴う発掘調査では、飛鳥時代から中世までの集落跡等が確認されており、美濃国分尼寺跡から東方に古代集落や生産域が存在する可能性が指摘されている⁽⁷⁾。また、分布調査では、美濃国分尼寺の推定寺域を中心に、美濃国分尼寺東遺跡・堅田遺跡を含む土壘の外周にも広く遺物の分布が確認されたが、美濃国分尼寺跡西側でも同様の傾向がみられた。この範囲では、過去に土中から須恵器(灰釉陶器、山茶碗を含むか)が大量に出土したと伝えられており、さらに西側では「美濃国」刻印須恵器も表採されたという⁽⁸⁾。特にこの場所は美濃国分尼寺跡南限の南から府中の美濃国府跡にいたる古道沿いに位置し、東山道に比定する説⁽⁹⁾とあわせて興味深い。



美濃国分尼寺跡 西側土壘（南西から）



美濃国分尼寺東遺跡（北から）



美濃国分尼寺西遺跡（北西から）



堅田遺跡（東から）

7. 石越遺跡 (いしこしいせき) (図3 採集遺物実測図 (3)、写真図版 4)

平尾地区北東部、大垣市との境界の山間に位置する。今の平尾集落は元来この付近に所在していたという伝承がある。通称「威徳寺谷」。現在、平尾にある威徳寺は、寺の記録によれば、応永 14 年 (1394) の開基で、「不破郡風越荘風越村ニ一宇ノ堂ヲ建立シ、天台宗円興寺東ニテ寺号ヲ威徳坊ト称シ、(中略) 天文年中ニナリ時勢ノ変遷ニヨリ信徒輩追次平尾村ニ移住セシニ從イ本坊モ共ニ移転シ」とあることから、天文年間 (1532~1555) までは石 (風) 越にあったという⁽¹⁰⁾。開墾などにより、改変されていると思われるが、多数の石塔が確認できる。明治 36 年 (1903) には、水田中から壺に入った古銭 (備蓄銭) が計 8,388 枚掘り出されており⁽¹¹⁾、関ヶ原町歴史民俗資料館所蔵の岩 (石) 越出土の古銭はこの一部の可能性が高いと思われる。出土古銭の種類は、和同開珎を始めとする皇朝十二銭から、宋・明銭まで 37 種におよぶ。遺物は古代から近世にかけての土器を確認した。



石越遺跡（南から）



石塔集積状況

8. 石仏谷遺跡 (図4 採集遺物実測図 (4)、写真図版 5)

平尾2号池西側、小字石仏谷に位置する。大正年間に溜め池が造られるまで、谷間が開墾されていたところで、水田の畦や石垣の跡が残っており、地名の由来となった石仏（千手觀音）が1体祀られている⁽¹²⁾。石越付近にあったとされる平尾の旧集落はこの付近まで広がっていたという伝承がある。遺物は須恵器、灰釉陶器、山茶碗を確認した。



石仏谷遺跡（東から）



（南から）

9. 垂井一里塚

一里塚は慶長9年（1604）に日本橋を起点として、一里（約4km）ごとに5間（約9m）四方、高さ1丈（約3m）の塚を街道の両側に築いたものである。垂井の一里塚は日守に位置し、国の史跡に指定されており、国史跡では中山道沿いで東京都板橋区志村のものと2カ所に限られている。東西10m、南北12m、高さ5m、塚の東面は一部削られ、最下部には崩落を防ぐため、石垣が積まれており、その上を花崗岩製玉垣が塚の全面を囲っている。塚の北側には道路から玉垣まで上がる階段がつけられているが、設置時期は明らかでない。また、塚の上には昭和6年（1931）に史跡指定を記念して立てられた「史跡垂井一里塚」の石柱がある。

なお、現在、街道南側の塚のみが残っているが、公園には北側に塚と思われる円形の地積が残っており、明治頃取り壊されたものと思われる⁽¹³⁾。



垂井一里塚（北から）

あさのよしながじんあと 10. 浅野幸長陣跡

慶長 5 年（1600）関ヶ原合戦の際に、東軍浅野幸長の陣となった。垂井一里塚の塚上に明治 38 年（1905）関ヶ原合戦古趾保存会によって建てられた「一里塚 浅野幸長陣所古趾」の石柱があり、この付近に推定されている。延宝 2 年（1674）の奥書のある『庵主物語』や弘化元年（1877）の序文のある『大垣藩地方雜記』などには一里塚を浅野幸長陣跡としているものがみられる⁽¹⁴⁾ことから、比較的早い段階で一里塚周辺が陣跡に比定されていたと思われる。



「一里塚 浅野幸長陣所古趾」石柱

ひ もりづかこ ふん 11. 日守塚古墳

垂井町字日守に位置する円墳。別称「銭塚」。現在、石室が工場内で保存されている。昭和 25 年・28 年（1950・1953）に発掘調査され、須恵器、勾玉、管玉、直刀、人骨が出士したというが、詳細な調査内容や遺物の所在は不詳。



日守塚古墳（南から）

ひ もりいせき 12. 日守遺跡（図 4 採集遺物実測図（4）～図 6 採集遺物実測図（6）、写真図版 5～7）

垂井町西部、南宮山塊北側の緩やかに張り出した扇状地の扇央部、関ヶ原町との境界付近に位置する遺跡。大岡明臣氏による昭和 53 年（1978）の分布調査によれば、磨製石器、叩石、石匙、石鏃等の石器のほか、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が確認されている⁽¹⁵⁾。また、鉄滓が多く採集されていることが特徴的で、日守（火守）という地名と相まって、鉄関連の生産遺跡と推定してきた。今回の分布調査では、大岡氏が主に調査した国道 21 号線北側は、植生の変化で表採調査が困難な状態であったが、国道南側は同氏の調査よりも広い範囲で須恵器、灰釉陶器、山茶碗等の遺物が確認された。



日守遺跡（北から）

13.金蓮寺跡・春王安王の墓 (図6採集遺物実測図(6)、写真図版7)

永享10年（1438）、鎌倉公方足利持氏と、関東管領上杉憲実の対立に端を発した永享の乱は、翌年持氏の自害によって終結した。持氏の遺児春王・安王は嘉吉元年（1441）結城合戦ののち、捕らえられ、京都への護送中、垂井の金蓮寺において斬首された。現在、国道21号線脇に、春王安王の墓とされる宝篋印塔が残されている。昭和34年（1959）伊勢湾台風の際に宝篋印塔の近くの老松が倒れ、根の付近から古瀬戸の三耳壺が2つ発見され、春王・安王の骨壺として金蓮寺・垂井町教育委員会にそれぞれ保管されている。『児靈像縁起之写（町指定文化財）』によれば、二人の遺骸を「当寺（金蓮寺）境内西側古松の下に葬る」とあり、江戸時代中期頃に書かれた『垂井村神泉記』によると「時宗金蓮寺、昔ハ、今云フ御所野ノ西、道場野ニ此寺アリ」とあるように、もとの金蓮寺は春王安王の墓がある御所野付近にあったと思われる。先の『児靈像縁起之写』によれば、寺域は4町とされ、春王安王の墓が境内西側にあたるということが分かるが、さらに南西の小字「道場野」までを寺域とする伝承もある。



春王安王の墓（南東から）



道場野付近か（東から）

14.池田輝政陣跡

慶長5年（1600）関ヶ原合戦の際に、東軍池田輝政の陣跡となった。現在の御所野、春王安王の墓付近と推定されるが遺構は確認できない。明治38年（1905）、関ヶ原合戦古趾保存会によって建てられた「御所野 池田輝政陣所古趾」の石柱がある。



池田輝政陣跡（北東から）

15. 宮処寺跡 (図7 採集遺物実測図 (7) ~図8 採集遺物実測図 (8)、写真図版 8~9)

宮処寺跡は『続日本紀』天平12年(740)12月癸丑朔条にみえる、聖武天皇が行幸した「宮処寺」に比定されている古代寺院跡で、御所野一帯に位置している。大正年間の耕地整理の頃までには寺域南側にあたる部分は大きく改変されたようである。ある時点まで残存していたという礎石の一部や瓦の分布状況などから、昭和15年(1940)小川栄一氏の『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』によって伽藍配置が推定された⁽¹⁶⁾。この調査結果をもとに昭和44年(1969)刊行の『垂井町史』では、現況にあわせた略図を示している。宮処寺跡では、これまでにも、広範囲に数多くの瓦類などが採取されており、軒丸瓦五型式、軒平瓦二型式、平瓦、須恵器の円面硯片などが表採されている。

今回の分布調査においても大量の古代瓦が表採された。小川氏が示した寺域を越える分布が予想されたが、実際は、ほぼ小川氏が想定した範囲に収まることが分かった。しかし、近接地に奈良時代から平安時代にかけての遺物がまとまって分布する地域がいくつか確認されることから、これらが宮処寺に関係する遺跡の可能性がある。



宮処寺跡 (南から)



(北から)

16. 御所野遺跡 (図8 採集遺物実測図 (8)、写真図版 10)

字御所野、宮処寺跡西側の微高地上に位置する遺跡。分布調査で須恵器や灰釉陶器が多く確認された。宮処寺跡に近接しており、関連する遺跡の可能性があるが、古代瓦の分布は皆無である。



御所野遺跡 (南西から)

17. 神明屋遺跡 (図9 採集遺物実測図 (9)、写真図版 10)

字神明屋、宮処寺跡東側の微高地上に位置する遺跡。聞き取り調査によれば、50年ほど前、道路工事の際に地表下約50cmから多数の瓦片が出土したという。分布調査では古代瓦を多く採集したほか、須恵器や灰釉陶器を確認した。宮処寺関連の遺跡である可能性が高い。



神明屋遺跡（北西から）

18. 朝倉グランド遺跡 (図9 採集遺物実測図 (9)、写真図版 11)

朝倉運動公園内の自由広場グランドを中心位置する遺跡である。公園建設以前は須恵器を中心とした多数の土器が確認された。工事によって大きく改変されていると考えられるが、現在も周辺では遺物の分布が確認される。



朝倉グランド遺跡（北東から）

19. 野田遺跡 (図10 採集遺物実測図 (10) ~図12 採集遺物実測図 (12)、写真図版 11~16)

朝倉運動公園北、字野田の微高地上に位置する。以前から多くの遺物が採集される場所である。分布調査では、特に公園芝生広場の近接地山麓から大量の奈良時代の須恵器を確認した。ごく狭い範囲からの採集であり、今後、詳しい調査が必要と考えられるが、「美濃国」刻印のある須恵器や円面鏡があることは注目される。



野田遺跡（北東から）



(南西から)

にしのこふん 20.西野古墳

宮代字西野、東海道新幹線ガード下南付近に位置する。円墳で、現在は滅失しているが、素文鏡、琴柱形石製品、土師器壺などが出土したとされ、現在、東京国立博物館に所蔵されている。



西野古墳（南から）

にしのいせき 21.西野遺跡（図13 採集遺物実測図（13）、写真図版16～17）

西野古墳南側の微高地上に位置する。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗を確認した。



西野遺跡（南西から）

あさくらこふんぐん 22.朝倉古墳群（図14 採集遺物実測図（14）、写真図版17）

朝倉丘陵部の頂上から東側斜面にかけて立地する古墳群で、5基が確認されている。うち1号墳は平成5年（1993）に三重大学によって発掘調査され、円筒埴輪、朝顔型埴輪が出土し、直径20mの円墳と判明している。埴輪は外面調整にB種ヨコハケ（IV期 5C前～中葉）が確認できる⁽¹⁷⁾。現在、古墳の大部分は朝倉運動公園内に立地しており、一部は墳丘の高まりや石室の石材と思われるものを見ることができる。今回の分布調査では、墳丘の近くから円筒埴輪の突帶部分や、須恵器が確認された。



朝倉古墳群（東から）

23. 真禪院遺跡

朝倉山真禪院地内に位置する。かつては境内から古代の遺物が多く採集されたというが、今回の分布調査では確認できなかつた。なお、真禪院は寺伝によれば天平 11 年（739）創建で、行基によって「象背山宮処寺」と名付けられたといい、山麓に所在したが、明治の神仏分離の際に山地を切り開き、当地に寺院が移転されている。



真禪院遺跡（南から）

24. 宮代遺跡

南宮山北側山麓部、現在、県立不破高等学校付近に位置する。校舎工事の際に土器が出土したといい、国体にかかる弓道場建設工事の際にも多数の土師器や須恵器片が出土したという。今回の調査でも、同様の遺物の小片を確認した。また、弓道場山麓西では、石塔の集積がみられる区域があり、中世から近世にこの付近に所在したとされる礼華寺跡の可能性がある。



宮代遺跡（東から）

25. 朝倉遺跡 (図 14 採集遺物実測図 (14)、写真図版 17)

南宮山塊の北側扇頂部に位置し、東に大谷側が流れる。過去に石斧、石鎌、石匙、石錘、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器等が確認されている。道路や駐車場建設等の際に多くの土器が出土したという。今回の調査では、土師器や須恵器を確認した。



朝倉遺跡（北西から）

26. 吉川広家陣跡

慶長5年（1600）関ヶ原合戦の際に、西軍吉川広家の陣となった。徳川家康に内通していた吉川広家は、西軍の総大将の毛利秀元らの出陣を阻害する位置に陣取って毛利勢の動きを拘束した。南宮山麓北側、真禅院から朝倉運動公園付近と推定されるが、明確な遺構は確認できない。



吉川広家陣跡付近（北東から）

27. 北野遺跡

（図14 採集遺物実測図（14）、写真図版18）
宮代字北野、南宮山から北に張り出した扇状地に位置する。これまでにも、石鎚、凹石、叩石、石錘、スクレーパー等が出土している。今回の調査では、これまで周知されていた範囲よりも広範囲で、石鎚等を確認した。



北野遺跡（南から）

28. 隣松寺古墳

宮代会下、隣松寺西に位置する。現在、隣松寺関係の墓地となっており、墳丘上には玄室の石材が露見している。円墳、直径約15m。



隣松寺古墳（東から）

よろいづかこふん
29. 鎧塚古墳

宮代字会下、現在の県立不破高等学校運動場建設のために滅失した兜塚古墳の300mほど北西に存在していた古墳である。明治初頭の耕地整理によって消滅したが、2段築成の円墳だったという。現在は水田になっており、旧状は判然としないが、近接する隣松寺に石室の石材の一部や、出土品の鉄製品の直刀と馬具の一部が残されている。



鎧塚古墳（南東から）



石室の石材（隣松寺境内）

なかやしきこふんぐん
30. 中屋敷古墳群

宮代字中屋敷、現在6基の古墳が確認されている。5号墳は前方後円墳とされるが、宅地化によって墳丘が失われている。6号墳は通称「狐塚」で前方後円墳の可能性があるが、前方部は破壊されており、頂部に祠がある。小片のため図示できなかったが、分布調査で、古墳時代の須恵器を確認した。



中屋敷6号墳（南西から）



中屋敷古墳群（東から）

31. 兜塚古墳

宮代字会下、直径 35m、高さ 6 m、2段築成の円墳。葺石がある。7世紀前半か。南宮山麓北側緩斜面に立地し、水田中にあったが、昭和 39 年（1964）県立不破高等学校運動場建設のため、名古屋大学考古学研究室によって発掘調査された。南に開口する両袖式の横穴式石室で、玄室長さ 5.2m、同幅 2.0m、同高さ 2.2m、羨道長さ 6.0m、同高さ 1.7m、玄室と羨道の間に鴨居石を置く。玄室東壁付近から鉄釘と人骨が発見された。副葬品は土師器の壺、須恵器の高坏、馬具（轡金具）、鉄鏃、刀子、鍔、金環、瑪瑙製丸玉、ガラス製小玉が出土したという。



兜塚古墳（『新修垂井町史 通史編』より転載）

32. 南宮神社神宮跡 (図 15 採集遺物実測図 (15)、写真図版 18)

南宮山山麓の北側に位置する。『延喜式』などには「仲山金山彦神社明神大」とあるが創建時期は定かでない。「南宮」の社名については、『扶桑略記』天慶 3 年（940）の平将門調伏に関する記事や『今昔物語』などに確認される。社伝によれば、もと府中に祀られていたものを崇神天皇の時に現在地に移したといわれ、府中の美濃国府から南方にあたることにより「南宮」と称されるようになったという。鎌倉時代から南北朝にかけては院領となり、応仁の乱中の文明 5 年（1473）には、美濃国に下向した一条兼良の紀行文『藤河の記』の中に南宮神社の例祭の様子が記されるなど、美濃国一ノ宮として崇敬を集めた。慶長 5 年（1600）の関ヶ原合戦で社殿は焼失するが、寛永 19 年（1642）徳川家光の発願によって再建された。神仏習合の神宮寺だが、明治の神仏分離で、三重塔など寺社部分は真禅院などに移築された。現在、それら近世の社殿跡の遺構が確認できる。分布調査では、元山大師堂跡、弁天堂跡などを確認したほか、山茶碗などの遺物を採集した。



南宮神社神宮跡（北から）



弁天堂跡（北東から）

33.最勝寺觀音堂跡

幕末頃に作成された絵図『美濃国南宮社之図』などによると、南宮神社北側に位置したと考えられるが正確な位置は不明である。

34.安国寺恵瓊陣跡

慶長 5 年（1600）関ヶ原合戦の際に、西軍安国寺恵瓊の陣となった。南宮山麓標高 112m に位置し、丘陵頂に尾根を 2 本の堀切で切断した曲輪を有する単純な構造の陣である（18）。

関ヶ原合戦当日は同様に南宮山麓に布陣した吉川広家に阻まれたため、安国寺恵瓊は戦闘に参加することなく、西軍は敗北した。



安国寺恵瓊陣跡（東から）

35.薬師堂遺跡（薬師堂跡）(図 15 採集遺物実測図 (15) ~図 16 採集遺物実測図 (16)、写真図版 19)

南宮山ハイキングコース西周りルート入口から 10 分ほどの山腹に位置する。江戸時代まで南宮神社の薬師堂が建てられていた場所である。薬師堂は延暦 12 年（792）開基と伝えられる。今回の分布調査で、薬師堂があったと推定される場所から北側に向かって山麓までの範囲で山茶碗、古瀬戸、常滑甕等を確認した。近世の薬師堂に伴う遺物ではない点が注目され、中世の南宮神社や南宮山信仰を知る上で重要な遺跡の可能性がある。



薬師堂跡（西から）



薬師堂遺跡（東から）

かんのんどうあと
36.観音堂跡 (図 16 採集遺物実測図 (16)、写真図版 20)

明治の神仏分離に伴って現在の真禅院に移築される以前は、宝珠觀音堂として、南宮山山頂の奥院高山社近くに所在していた。『木曾路名所図会』などにも記されており、天平神護2年（766）創建と伝えられる。昭和46年（1971）に名城大学が測量調査を行っており、礎石や石垣等が確認されている⁽¹⁹⁾。今回の分布調査では、山茶碗のほか、移設前の觀音堂に関係すると思われる近世の瓦や陶磁器類が確認された。



觀音堂跡 建物礎石（南から）



石垣跡（東から）

せんじゅどうあと
37.千手堂跡

觀音堂跡の南方に所在していた小堂。削平地に「奉 読誦法華經三千部回向」の石柱と堂宇跡と思われるやや高くなった場所が確認できる。明治の神仏分離で真禅院に移されたのち、昭和8年（1933）正行院へ移築された⁽²⁰⁾。付近には同様の削平地がいくつかみられ、詳細は不明なもののが南宮神社関係の堂宇跡の可能性がある。



千手堂跡 石柱



堂宇跡か（南東から）

なんぐうさんちょうきょうづかぐん
38.南宮山頂経塚群 (図 17 採集遺物実測図 (1)、写真図版 21)

南宮山山頂付近の南宮神社末社高山社東側に隣接して立地している。一帯に石組が確認でき、「如法経」と自然石に彫られた石塔が現存している。昭和 38 年 (1963) に経筒の破片、常滑の外容器及び古瀬戸の片口鉢の蓋が出土している⁽²¹⁾。今回の分布調査では、経塚に伴うと考えられる経筒の破片や古瀬戸などを確認した。



南宮山頂経塚群 如法石 (南から)



集石状況 (北から)

もうりひでもとじんあと
39.毛利秀元陣跡

慶長 5 年 (1600) 関ヶ原合戦の際に、西軍の毛利秀元の陣となった。南宮山東方、404m の峰に位置する。9 月 7 日から 15 日の決戦当日までの間に構築された。陣跡からは南宮山で関ヶ原方面を見ることができない位置にあり、陣も南及び東側の防御に主眼を置いた構造になっていることから、大垣方面を正面として意識した築城と考えられている⁽²²⁾。



毛利秀元陣跡 主郭部 (南西から)



土墨 (北から)

なかせいせき
40. 中瀬遺跡 (図 18 採集遺物実測図 (18)、写真図版 22)

宮代字中瀬、微高地上に位置する。分布調査で須恵器、山茶碗、古瀬戸などが確認された。



中瀬遺跡（東から）

よつじいせき
41. 四辻遺跡 (図 18 採集遺物実測図 (18)、写真図版 22)

宮代字四辻、微高地上に位置する。この付近には四辻古墳という古墳があったと伝えられ、『新修垂井町史』によれば、明治 45 年 (1912) に和同開珎 5 枚の入った陶製の骨蔵器、須恵器が出土し、東京国立博物館に所蔵されているというが、詳細は不明である。分布調査では古墳時代から奈良時代の須恵器片が多数確認された。



四辻遺跡（南東から）

まんどころいせき
42. 政所遺跡 (図 19 採集遺物実測図 (19)、写真図版 23)

宮代字政所、南宮大社参道東側に位置する。藤岡謙二郎氏は「マンドコロ」という地名や地割などから、この周辺を不破郡衙に推定している⁽²³⁾。過去には付近から「美濃国」刻印須恵器片が出土しており、不破郡大領の宮勝木実を祀る大領神社にも隣接している。分布調査では、宮代公民館から宮代小学校の間で顕著に須恵器や灰釉陶器が確認されたほか、山茶碗も一部表採された。



政所遺跡（南東から）

43.天皇遺跡 (図 19 採集遺物実測図 (19)、写真図版 23)

宮代字天皇、微高地上に位置する。分布調査で須恵器、灰釉陶器、山茶碗が確認された。



天皇遺跡（北西から）

44.大外道遺跡 (図 20 採集遺物実測図 (20)、写真図版 24)

宮代字大外道、南宮大社東側、扇状地上に広がる遺跡である。分布調査で灰釉陶器、山茶碗等が多く確認された。



大外道遺跡（北東から）

45.大領神社北古墳

宮代字堅瀬古、大領神社北側に位置する。現在、墳丘は確認できず、墳丘の名残と思われる三角地に祠が建てられている。分布調査で遺物は確認できなかった。



大領神社北古墳（北から）

46. 大領神社古墳

大領神社内に位置したと言われている古墳である。現在の社殿は墳丘の上にあると伝えられているようだが、それを示す遺構等は確認できず、詳細は不明。分布調査では、小片のため図示できなかったが、須恵器と山茶碗を確認した。また、昭和30年代には、神社東側で石斧が採集されている。



大領神社古墳（北西から）

47. 森上古墳

大領神社西側、扇状地上に位置する。円墳か。現在は墳丘上に南宮社家だった不破惟益の墓（町史跡）が建てられている。分布調査で古墳に関する遺物は確認できなかった。



森上古墳（北西から）

48. 杉ノ本古墳群

宮代字杉ノ本、南宮山東側の扇状地上に位置する。壬申の乱の際、大海人皇子がここにあった杉の木に逃げ込んだという伝承が残る。円墳3基が確認できた。また、聞き取り調査によれば、かつて付近からは現在所在が不明なもの、鏡が出土していると伝えられており、注目されるほか、過去には、古墳時代に属する須恵器の廻も採集されている。



杉ノ本古墳群（北西から）

みやしろはいじあと 49. 宮代廃寺跡

昭和 42 年（1967）および昭和 47 年（1972）の 2 度にわたる発掘調査が行われ、塔基壇や築地跡の規模が明らかになっている。基壇は瓦積み基壇で、基底部に用いられている軒平瓦等から、創建時に遡るものではなく、奈良時代末から平安時代初頭にかけて再建されたものと推定されている。また塔心礎が地上に 1.1m ほど露出しており、創建時から位置を動いていないことが確認されている。塔跡の北側及び東北隅の築地跡は、地山の直上に約 20 cm の厚さで黒褐色土が南北幅約 3 m にわたっており、旧寺域を限る築地跡と推定される。推定寺域は約 150m 四方である⁽²⁴⁾。

出土した瓦類は、単弁蓮華文や複弁蓮華文の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦など白鳳時代から平安時代に及んでいる。特に単弁蓮華文軒丸瓦は高句麗系の軒丸瓦であることから、当廃寺への渡来系の在地豪族との関連性をうかがわせる点で興味深い⁽²⁵⁾。不破郡大領、宮勝木実の氏寺の可能性や、天平 12 年（740）の聖武天皇の美濃行幸の際の「宮処寺」にある説がある。分布調査では、地形上低くなっている寺域東側で多くの古代瓦の小片を確認した。推定寺域の外だが比較的広範囲に分布しており、一体のものとして考えておきたい。



宮代廃寺跡 塔心礎（北西から）

たに まいこふん 50. 谷の舞古墳

宮代森下に位置する。昭和 40 年代までは、東西約 12m、南北約 3 m、高さ 1.5m の規模で墳丘の一部が現存していたというが、耕地整理の際に破壊され、現在は確認できず、詳細は不明である。



谷の舞古墳（南西から）

みなみもりしたいせき
51. 南森下遺跡 (図 20 採集遺物実測図 (20) ~図 21 採集遺物実測図 (21)、写真図版 24)

宮代の御前谷川南方に位置する。これまでに石鏸や縄文土器の破片が採集されていた。今回の分布調査では、従来知られていた遺跡の範囲よりも広い範囲で、須恵器、灰釉陶器、山茶碗等を確認した。



南森下遺跡（西から）

だいらこふんぐん
52. 平古墳群

宮代字南山、南宮山東側に位置する古墳群である。標高 84mから 90m前後の尾根上に 3 基、別の標高 60mから 90mの尾根上に 4 基、計 7 基が分布する⁽²⁶⁾。



平古墳群（東から）

ちやうすやまこふんぐん
53. 茶臼山古墳群

平古墳群の南に位置する古墳群。計 8 基を確認した。



茶臼山古墳群（北から）

こぐろみいせき
54. 小黒見遺跡 (図 21 採集遺物実測図 (21) ~図 22 採集遺物実測図 (22)、写真図版 25~26)

南宮山の東山麓、宮代字小黒見に所在する。従来から遺物が採集される場所で、これまで、石皿、磨石、敲石、古代瓦などが確認されている。特に、茶畑からほぼ完形の古代瓦が出土しており、地元の伝承では、茶の生育の悪いところは窯体であるといわれていた。今回の分布調査では、上記のような石器類や古代瓦は確認されなかった。しかし、茶畑北側、柚の木川までの範囲で多くの須恵器を確認した。



小黒見遺跡 茶畑（北から）



茶畑北側（東から）

みなみやまこふんぐん
55. 南山古墳群

宮代字南山、標高 70m の尾根上に 2 基の方墳、これから東に派生する尾根上にも 2 基の方墳が位置する。これらは 1 辺 20m 規模の大型墳と 8 m 規模の小型墳がセットをなしている。さらに、これより東に張り出した尾根上に 1 基の方墳、南の鉄塔際にも方墳のあった可能性がある⁽²⁷⁾。



南山 1 号墳（北から）



南山 6 号墳（南から）

みなみやま ごうふん
56. 南山 5号墳 (図 22 採集遺物実測図 (22) ~図 23 採集遺物実測図 (23)、写真図版 26~27)

標高 207.6m、南宮山最高所に立地する独立墳で、当初は「扇小平古墳」と呼称されていたが、山麓の南山古墳群との関係から 5号墳としている。1辺約 50.1m×41.5m の2段築成の大型墳で、墳丘の高さは、北側の掘割から 5.4m、南側で 5.9m を測り、1段目は 1.5 m 前後の低い段をなす。墳頂は 17.7m×15.4m と広く、葺石が確認できる⁽²⁸⁾。従来から埴輪片が採集されていたが、今回の分布調査でも多くの埴輪片が確認された。採集場所は2段築成のテラス部分に集中しており、黒班を有する。



南山 5号墳（西から）



（南から）



南山 5号墳から町北西部を望む



埴輪分布状況

さかいのこふんぐん
57. 境野古墳群

南山古墳群の東斜面に立地する古墳群。円墳が 7 基確認された。小片のため図示できなかつたが、分布調査で古墳時代の須恵器を採集した。



境野古墳群（南から）



（西から）

さかいのこふん
58. 境野古墳

境野古墳群の南東、標高 30m に位置する独立墳。直径 15m の円墳で精美な堀割を持ち、中央には大きな撓乱坑が確認できる⁽²⁹⁾。小片のため図示できなかつたが、分布調査で周辺から土師器と須恵器を採集した。



境野古墳（南から）



撓乱坑（南西から）

さかいのいせき
59.境野遺跡 (図 23 採集遺物実測図 (23) ~図 26 採集遺物実測図 (26)、写真図版 27~30)

南宮山東山麓、東に張り出した舌状台地上に位置する。以前から、石器の剥片、弥生土器、土師器、須恵器の破片などが出土している。今回の分布調査では、従来周知されていた範囲を大きく越えて遺跡が広がっていることが分かった。特に八幡神社に隣接する付近では、かなりの量の古墳時代の須恵器が採集されたほか、須恵器質の土錘が確認された。



境野遺跡（南から）



八幡神社北側（西から）

はちまんじんじやこふんぐん
60.八幡神社古墳群 (図 27 採集遺物実測図 (27)、写真図版 31)

宮代字境野、八幡神社付近に分布する古墳群。標高 40m から 50m にかけての緩斜面に立地し、最も高い標高 50m の尾根上には 1 辻 14m 前後の方墳が見える⁽³⁰⁾。従来、八幡神社西に 7 基、南に 7 基とされてきたが、その他に西で 2 基、南で 6 基を確認した。



八幡神社古墳群（東から）



（北から）

61. 大平古墳群

八幡神社古墳群の東側に分布していた古墳群。名神高速道路建築に伴う土砂採集のため、昭和 38 年（1963）発掘調査された。これまで、調査主体や遺物の所在が不明であったが、名古屋大学が所蔵している遺物が該当する可能性があり、今後更に詳細な調査が必要であると考えられる。『垂井町史』によれば横穴式石室をもつ群集墳で、8 基が分布していた。現在は滅失。



大平古墳群（東から）

62. 栗原古墳群（図 27 採集遺物実測図（27）、写真図版 31）

栗原地区南宮山東山麓の標高 30m 前後の尾根上に位置する古墳群。現在までに計 6 基が確認されている。1 号墳は円墳で通称「黄金塚」。2 号墳は全長約 44m の前方後円墳で、後円部径約 28.5m、同高さ約 3m、前方部幅約 12m、同長さ約 12m、同高さ 2.5m、くびれ部幅約 13m、周濠と葺石が確認出来る。従来、埴輪は無いとされてきたが、今回の分布調査で、新たに円筒埴輪の突帶部分と、盾型埴輪と思われる一部分を確認した。

3 号墳は、1・2 号墳とは別々の尾根上に位置していたと考えられ、昭和 37 年（1962）の名神高速道路建設の土砂採取によって、滅失しており、工場敷地として改変されている。岐阜県教育委員会が行った発掘調査で、石室や弥生土器が出土し、古墳時代前期を遡る可能性が指摘されている⁽³¹⁾。

残る 3 基（4～6 号墳）は 1～3 号墳の南方の尾根上に立地する円墳で、周辺から古墳時代の須恵器のほか、弥生土器と思われる破片も確認された。



栗原 1 号墳（北東から）



栗原 2 号墳（西から）

63. 扇平古墳群

栗原古墳群の西、標高 120m～180mの北東向きの尾根上に分布する古墳群である。3基の円墳を確認した。



扇平古墳群 (南から)



(北西から)

64. 清御子古墳

栗原古墳群の南西、字清御子平。近傍に壬申の乱の行軍地としての伝承があることから、大海人皇子（天武天皇）を祀る清御子神社がある。標高 90m前後に位置する独立墳で、葺石を備えた直径 18mの円墳である⁽³²⁾。なお、南側山道付近で、弥生土器片が分布する区域がある。ごく限られた範囲で詳細は不明だが、栗原古墳群との関連も含めて注目される。



清御子古墳 (南から)

65. 栗原九十九坊跡・栗原山中世墳墓群

くりはらじゅうくぼうあと くりはらやまちゅうせいふんぼぐん
栗原城跡 (長宗我部盛親陣跡) (図 28 採集遺物実測図 (28)～図 29 採集遺物実測図 (29)、写真図版 31～34)

栗原九十九坊跡は、栗原山の中腹及び山麓に存在したと伝えられる中世寺院群である。鎌倉時代のはじめに「久保寺双寺」があったとされ、他にも、栗原山山麓にあった清水寺の梵鐘銘に「美州不破郡栗原村清水寺奉鑄治鐘 宝治元年未丁九月廿日東大寺大工散位山河助清衆徒」とあり、宝治元年（1247）には、創建されていたと思われる。また、栗原山に連續す

る養老町の象鼻山一帯についても、江戸時代の記録に「象尾山別所寺四十九坊」などとあることから、現栗原山から象鼻山一帯に「九十九坊」や「四十九坊」と呼ばれる寺院群があつたと推定される⁽³³⁾。今回の分布調査によって、清水寺跡を含む東山麓の広い部分から、人工の削平地が多く確認され、山頂付近だけでなく、広範囲に寺院が所在していた可能性が高まつた。また、石造仏等が多く出土したとされる中世墓群からは、蔵骨器と思われる古瀬戸や常滑の甕が確認され、古者の話によると、もともと石組が残されていたと言う。山頂部に集石墓による墓域を持ち、山麓まで広がる大規模な中世寺院群の姿が想定される。詳細な寺域の推定等、今後更に調査を進める必要がある。

また、山頂付近は関ヶ原合戦時に長宗我部盛親の陣となっており、土壘で囲われた方形区画や南東山腹に東面する数段の削平地が構築されている⁽³⁴⁾。今回の分布調査では、その方形区画から南の養老町象鼻山に続く尾根上に、堀切や土壘と思われる遺構も確認できた。



栗原九十九坊跡（西から）



削平地（北東から）



中世墓群（南西から）



方形土壘（北東から）

66. 栗 棘 庵 跡

栗原山東山麓部に所在した寺院跡。地元では「リショウジ」と伝わることから、天保9年（1838）の栗原村明細帳に清水寺と共にみえる利法寺がそれにあたるか。栗原九十九坊に關係する寺院であった可能性がある。

67. 清水寺跡

栗原山東山麓部に所在した寺院跡。栗原九十九坊に關係する寺院として、山麓部に唯一残っていたが、昭和48年（1973）に焼失した。愛知県知多市の八社神社に清水寺の梵鐘が所蔵されており、銘は「美州不破郡栗原村清水寺奉鑄治鐘 宝治元年丁未九月廿二日東大寺大工散位山河助清衆徒」とあり、宝治元年（1247）以前に創建されていたと思われる。また、西側斜面には断続的に削平地が広がっており寺域の可能性がある。小片のため図示できなかつたが、分布調査で灰釉陶器、常滑の甕の破片を確認した。



清水寺跡（東から）



西側削平地（東から）

68. 栗原山麓遺跡

栗原山東山麓、養老町との町堀付近に分布する。養老町の栗原天待遺跡に連続する遺跡である⁽³⁵⁾。この付近に大正の頃まで「丸山」という古墳があつたというが詳細は不明。分布調査で縄文土器、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗等を確認した。なお、県道西側の山麓部では、比較的濃密な遺物の分布がみられた一方、東側では極端に少なかつた。ほ場整備など、過去の土地利用に起因する可能性も考えられるが、今後の調査においての課題としたい。



栗原山麓遺跡（東から）